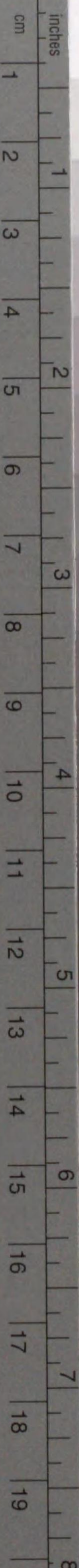


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]

154
98

梅かしの

荷
丸
(5)
(1)

東京
印刷

154
98



昭和四年四月

154
98

課

出版
本

AA 154 to

福

田
大
同

154
98



九
〇
八



九
〇
八

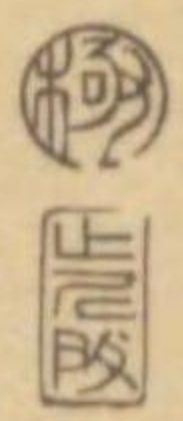
中打

歌右衛門

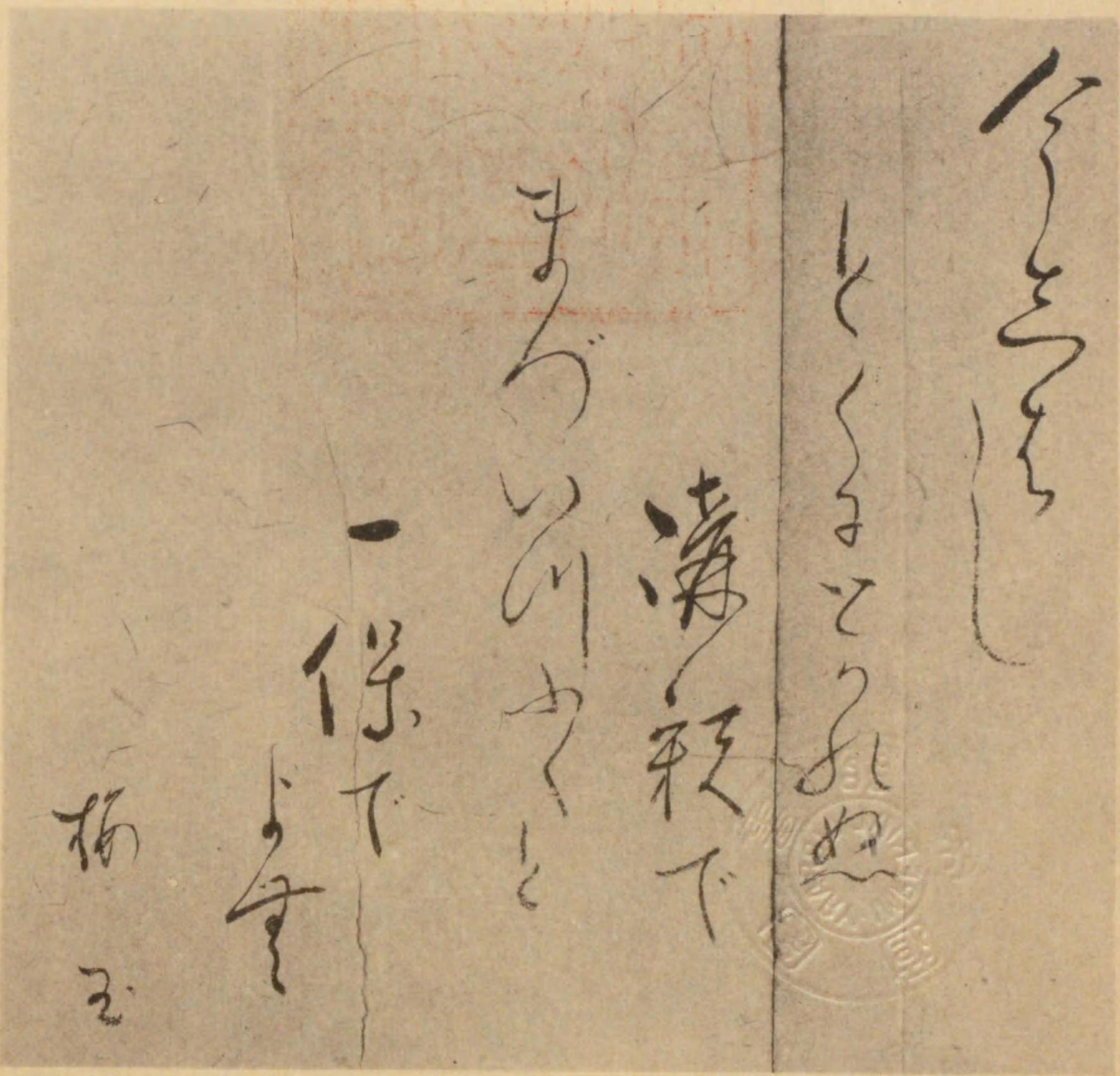


七変化之内

豊國筆



藏氏郎太芳木南 物刷しり配へき先客てしと言狂産土お「鬼鐘朱」の門衛右歌世三



岡島眞藏氏藏 三世歌右衛門病狂の中

梅かのこ

三世歌右衛門傳

文學博士 伊原青々園述



三世歌右衛門が名人であつた理由はいろいろありますが、第一に藝の間口が廣い上に、奥行も相當に深かつたこととあります。敵役も出來れば立役も出來る、また女方も出來る、時代物もすれば世話物もする、そうして地藝のほかに所作事もうまい。それと第二には、もと／＼大阪の役者であるから、その土地で悦ばれるのは當然だが、江戸へ來てもやはり評判がよろしい。今日でも多少さういふ弊は免れないけれど、昔は土地最負の感情が非常にはげしくて、上方の役者が江戸へ來ると、何んな名人でもケチをつけられる。それと同じやうに、江戸の役者が上方へ行つた場合にも、悪口を言はれがちで、京、大阪、江戸、いはゆる三が津の何處へ行つても一様に評判のよいといふ役者は珍らしい。ところが三世歌右衛門はその「珍らしい部」に屬する人だつたのであります。これは第一に述べた通り、藝が廣くて深いといふ事が、さういふ結果を齎らしたに違ひないが、なほそれ以外に

當人がそれだけの人徳を具へて居たからだらうと思はれます。

歌右衛門の父母

とにかく三世歌右衛門はそういふえらい役者であります。實父はその時代の名優だつた元祖中村歌右衛門であります。この元祖歌右衛門も江戸へ来て評判がよくて、やはり「珍しい部」に屬する人でありましたが、これは實悪がほとんど専門でありました。もとは加州金澤で大關俊庵といふ醫者の子だつたのが、自分の氣まぐれから田舎廻りの役者になり、終に出世して、三が津に指折り數ふるほどの名優となつたのであります。そうして素生が右の通りであるから、舞臺へ出しても人品と落着きとがあつて、ことに社袷姿がよく似合つたといひます。實父はそんなえらい役者で、母親は何うかといふと、道頓堀の若太夫座といふ小劇場で勘定場をつとめて居た源藏といふ者の妹であります。この源藏の子も、二世小川吉太郎といふ相當の役者であつたことから考へても、母の實家も芝居で生活して、かなりな身分であつたらうと思はれます。

子供芝居へ出勤

つまり、三世歌右衛門はそんな夫婦の間に出來た子で、幼名を福之助といひました。生まれた年月については種々な説があつて一定しませんが、安永七年の三月に生まれたといふのが本當らしい。この時に父の元祖歌右衛

門は六十五歳であります。それまで子のないことを残念がつて、御祖師様に願つたお蔭でやつと福之助が出來たといふ事があります。しかし父の元祖歌右衛門は、自分こそ若氣のいたりで役者になつたけれど、子供だけは醫者にして、先祖の家業を繼がしたいと思つたので、丁度姉の亭主が中川正圃といふ醫者であるから、そこへ福之助をやつて學問を仕込むつもりだつたといひます。また一説には、福之助の子がらが醜いので、そのために役者にするを躊躇したのだともいひます。

ところが本人の福之助は、何うかして役者になりたい。多分母親もそうだつたのでありましょう。だから父と同業の先輩たちから、その事を父に頼んでもらつたけれど、元祖歌右衛門はなか／＼承知してくれませぬ。そこで七歳の時とかに、千日前の竹林寺にあつた不動尊に願をかけて、雪中に水垢離をとつて居ると、脱ぎ捨てた着物を盗坊にさらはれて大層こまつたといひます。しかしその不動尊の御利益だつたのか、ある日、父親が福之助を連れて菩提所の正法寺へ參詣した歸りに、ふと若太夫座の前を通ると、前に述べた伯父の源藏が勘定場に居て見物を勧めるので、一幕だけ覗いて見ました。子供芝居であるから、福之助と同じ年輩の少年たちが舞臺に出て居るのを見て、倅も出さうといふ氣になつたらしい。結局その次ぎの興行から福之助もその若太夫座の子供芝居へ出ることになつて、「廿四孝」の横藏、「伊勢物語」の紀有常など、座頭どころの役をつとめ、後にはこの一座で、京都、大津、西の宮までも打廻るやうになりました。また子供芝居を脱けて、大劇場の中の芝居へ子役として出勤した事もありました。

歌右衛門となる

四

そのうち、福之助が十四歳の時に、父の元祖歌右衛門が歿しました。自分は相變らず子供芝居へ出て居りましたが、十七歳の時、即ち寛政六年の冬、はじめて大劇場の角の芝居へ出ることとなり、その時はもう子役でなくて敵役をつとめ、同時に亡父の名を繼いで、はじめて三世歌右衛門となりました。元祖の倅であるから二世となるべき筈であります。もと／＼父は福之助を役者にしないつもりであつたから、二世歌右衛門といふ名前は門弟の中村東藏に繼がせ、自分は歌七と改名して居ました。それが福之助の五歳の時であります。この二世歌右衛門は何か面白くない事があつたと見え、元祖の歌七が歿する前年に名前を取上げられて、元の東藏となつたので、福之助が三世歌右衛門になつたのであります。

はじめて三世歌右衛門となつて角の芝居へ出た時は、「奉る千篋賜」といふ狂言で、元吉四郎をしました。これは奥州高館に居る義經を裏切るといふ役であります。それから「忠臣藏」の定九郎と天川屋の丁稚伊吾、「信仰記」の松永鬼藤太、「桂川」の丁稚長吉など、三枚目の役ばかりをして居ます。そうして翌七年冬、京都の南側芝居へ行つて、さぞわん女といふ滑稽な悪女の役をつとめ、八年は同地の北側芝居へ轉じて、「薄雪」の團九郎、道行に猿の所作をつとめ、同年冬、大阪へ戻つて中の芝居へ出で、更に九年の冬から若太夫座へ轉じて、當時の名人といはれる嵐雛助の「非人仇討」に須藤六郎右衛門をつとめ、また「伊賀越」の城五郎と武助、「黒船」の

判じ物喜兵衛をしましたが、十年の冬、再び中の芝居へ戻つて、丁度江戸から上つて來た澤村宗十郎が「五大力」の薩摩源五兵衛をするので、歌右衛門は箱廻し彌助をしました。

翌十二年は北の新地の芝居へ行つて、「ひらがな」の梶原平次と船頭松右衛門、切狂言に「釣狐」をつとめ、更に堀江の芝居へ轉じて、「戀女房」の左内と定之進と奴逸平、「隅田川」の法界坊を演じ、その冬から角の芝居へ出て、「惠寶大功記」（淺尾爲十郎の光秀）に小田春永、切に「鶏三番叟」をしました。この時が廿三歳であります。敵役でも次第に重い役へ廻されて、謂はゆる「實惡」の地位に上つたのみならず、立役や女方や所作をも立派にやつて退けることを世間に認められたのであります。

五右衛門の代り役から名古屋山三の競争まで

寛政十二年の翌年に年號が改まつて、享和元年となりましたが、同年正月はやはり角の芝居で「けいせい忍逢淵」といふ狂言に、先輩の淺尾爲十郎が石川五右衛門と石田の局をする筈のところ、病氣のため休んだので、その代り役をつとめました。この爲十郎は當時京阪で第一流の名優であります。廿四歳の青年でその代りをつとめただけで、歌右衛門が何んなに世間から認められて居たといふ事が證據だてられるのみならず、事實においてこれが當人の出世する第一の階段となりました。

それから後、歌右衛門が出勤した座名や役名を詳しく列べても、讀者に興味がなからうと思ひますから、省略

して主要な分だけを左に掲げます。

「忠臣講釋」の矢間十太郎。享和元年夏、堀江芝居。

「五大力」の薩摩源五兵衛。同座。

「覺仇討」の奴筆助。同年九月、京都北側芝居。

「堀川」の猿廻し與次郎。享和三年正月、京都薬師芝居。

「妹背山」の芝六と鱧七。同年四月、北新地芝居。

「岩井風呂」の宿無團七。文化元年三月、京都北側芝居。

「戀深川」の玉屋新兵衛。同年十月、同座。

「三代記」の三浦之助。同座。

「唐人殺」の今木傳七。文化二年三月、同座。

「戀飛脚」の忠兵衛と孫右衛門。同年九月、同座及び同三年九月、堀江芝居。

「千本櫻」の忠信と權太。文化二年十二月、京都南側芝居。

「鴛鴦」の景事。文化三年正月、中の芝居。

「國性爺」の和藤内。同年三月、角の芝居。

「姫山姥」の八重桐と怪童丸。同座、及び同四年正月、堀江芝居。

「反魂香」の吃の又平。文化三年夏、京都南側芝居。

「布引瀧」の齋藤實盛。文化四年正月、堀江芝居。

「八百屋心中」の半兵衛。同座。

「伊勢音頭」の福岡貢。文化四年七月、京都北側芝居。

以上は享和元年の廿四歳から文化四年の三十歳まで、七年間に歌右衛門がつとめた役々のうち、今の人たちに合點の行くものだけを引抜いたのであります。このほか、今日は上演されぬ狂言であるため讀者に吞込めないものは省略しました。年齢から言つても油の乗つた最中ではありますが、これを見ても歌右衛門の藝が如何に多方面であつたことが分ります。

ついで、文化五年正月は、中の芝居で「けいせい品評林」の名古屋山三と佐々木藏人と浮世又平の三役をしました。これは山東京傳の小説「稻妻表紙」を脚色した新作であります。同時に隣の角の芝居でもそれに押かぶせて、同じ小説から脚色した「けいせい輝双紙」を演じ、二世嵐吉三郎が名古屋山三の役で、つまり兩座の競争となりました。

この吉三郎といふ人は、歌右衛門よりも先輩の人気役者であるのみならず、至つて美男であるし、名古屋山三のやうな役は最もその得意とする所で、この競争は歌右衛門の方に引け目があつたに拘はらず、當時の評を見ると、道具と衣裳と役者の綺麗なのは角の芝居、狂言と役者の上手なのは中の芝居、つまり歌右衛門の方へ團扇が揚

がつて居ます。

初めての江戸下り

この兩座競争の名古屋山三をした中途から、切狂言に「隅田川」を出して、歌右衛門は法界坊と「菖賣」の所作をつとめ、それを大阪の名残りとして江戸の中村座へ下りました。歌右衛門の江戸へ来るのは前後三度であります。これが最初で、三十一歳の時であります。

さて、江戸へ下つて初めての興行に、既に上方でやつた玉屋新兵衛と猿廻しの與次郎とをつとめ、次ぎの替りが、「千本権」の知盛と忠信と權太とであります。その知盛の役で振り散らした碓の角が見物に當つたといふので喧嘩になつて、歌右衛門は顔に疵をつけられたが、その疵口に銀箔を押し舞臺をつとめ、また客先きへ「紫を顔にもらふや江戸の花」といふ句を摺物にして配つたのみならず、後にその句に書き足して

「紫を顔にもらふや江戸の花。祇園守か鶴にしようか。風流なかきつばた。」
といふ唄が出来たといひます。

この時に、隣の市村座は三世坂東三津五郎が座頭で、つまり此處でも兩座のはげしい競争となり、歌右衛門に疵をつけたのは三津五郎側の者であつたといふ噂であります。しかし興行の成績は三津五郎の方が大負けで、「千本櫻」に對抗して「忠臣藏」をやつたけれど、見物が来ないために七日目に興行を休んでしまひました。



その翌年の文化六年にも、歌右衛門は中村座に居居はつて「忠臣藏」の七役をつとめて大評判を取りました。七役といふのは、師直、由良之助、定九郎、與一兵衛女房、彌五郎、義平であります。なほ、この年に深川淨心寺の妙見堂を再建し、石の鳥居や手水鉢までを寄進して、その時分の金で千五百兩かけたといひます。前に述べた通り、そも／＼元祖歌右衛門が法華信者であつたから、御祖師様に願がけて三世歌右衛門が出来たくらゐであります。その元祖歌右衛門が江戸へ下つた時、右の淨心寺の妙見堂を建立し、それがもう大破に及んだので、三世歌右衛門が亡父の意を受繼いで再建したのであります。この淨心寺は大正十二年の大震災で焼失しましたが石の鳥居や手水鉢は今でも焼跡に残つて居る筈であります。

文化七年の冬から、歌右衛門は中村座の座頭になりました。それまでは坂東彦三郎が座頭だつたのを、上方から来た歌右衛門に譲つたのは、それだけ歌右衛門に實力があつたからであります。隣の市村座はやはり三津五郎が座頭で、相變らず互ひに競争して居ましたが、八年の三月興行に三津五郎が「七變化」の所作を出して、そのうちの「梶原源太」に「今年や南瓜の當り年」といふ文句がありました。これは歌右衛門に當てついたのであります。その「七變化」が大いに當つて、中村座の方は見物が薄くなつたので、負けず嫌ひな歌右衛門は金主の大久保今助に強請して、此方も急拵へで「七變化」を出しました。それは傾城、座頭、業平、角兵衛獅子、橋辨慶、海士、朱鐘馗、これだけを一人で踊りました。「南瓜」といはれるほど不男の歌右衛門が傾城をするといふので、大かた化物に見えるだらうと冷かし半分に行つて見ると、そうで無いばかりか、却つて藝のうまさを感じ

させられ、この「七變化」が大評判になつたために、三津五郎の方は途中で興行を休んでしまひました。かやうにして、歌右衛門の江戸滞在は五年つゞきました。最後の文化九年は、三月興行に「清水清玄」と「道成寺」の所作を演じ、いよく大阪へ歸るといふ九月の暇乞ひに、「ひらがな」の松右衛門と「山姥」と「舌出し三番叟」をつとめ、これきり江戸を立ちました。

嵐吉三郎との競争

五年ぶりで大阪へ歸つた歌右衛門は、同年冬、中の芝居で例の「忠臣藏」の七役をやりました。七役といつても、江戸でやつた與一兵衛女房と彌五郎とはよして、その代りに勘平と「鎌腹」の彌作をしました。そうして翌年の二月興行に「繁夜話」の柿木金助と例の「七變化」の所作を出しましたが、先年、名古屋山三で競争した嵐吉三郎が、丁度この時にも隣の角の芝居に居て「達大礎」の金井谷五郎をつとめ、そこで再び兩優の競争がはじまつて、これを聲援するため最負々々から贈つた幟や引幕は道頓堀はじまつての盛觀でありました。

歌右衛門の分

- 一、紫、淺黄、萌黄縮緬、都合十二本。(江戸堺町茶屋十八軒、吉原扇屋二階中、囃子方中より)
- 一、幅廣唐木綿三幅、茶地かちん。(堂嶋濱より)
- 一、木綿、唐仕立。(天竺横町ヲキセン中より)

一、歌右衛門紋付、紫幕。(大手連中より)

一、桃色縮緬、名前白あげ。(大手連の内より)

一、五色縮緬、五幅幟。

一、白加賀絹、「旭さす團扇も上る中の入、西大關三國一の山」。(ヒイキより)

この幟に錢五十貫文と菰卷三樽を添ふ。

一、幅廣唐木綿五幅、生壁地、紅あげ。(ヒイキより)

帆柱を幟の棹に仕立て、住吉街道または嶋の内より見ゆる。

吉三郎の分

一、幅廣木綿、茶地。「日本無双嵐吉丈」。(眞底ヒイキより)

一、幅廣木綿、茶地。「璃寛大妙人」。(金輪際ヒイキより)

一、空色縮緬、大吹抜、吉三郎替紋づくし。(船場ヒイキより)

一、吉三郎紋付、紫幕。(大手連中より)

一、五色縮緬、五幅幟。

一、二幅木綿、茶地、白あげ。五本。(祇園新地ヒイキより)

一、花色地、かちんあげ。五本。(同上より)

以上は眼だつたものだけを擧げたので、そのほか、普通の幟はその数の知れないほど澤山あつたといひます。この時に、いろ／＼な落語が出来ましたが、そのうちに次ぎのやうなのがあります。

「亭主は芝翫びいき。女房は璃寛びいき。その中に一子を儲け、その喰ひそめに亭主椀を求めけるに、橘の模様の蒔書ありしを求めて膳にすへる。女房大いに笑ひ、「かねて御前の芝翫びいき、鶴の模様でありさうなもの、璃寛さんの橘の模様は。「知れたこと、何喰ふても當らぬやうに」。

「芝翫」は歌右衛門の俳號で、鶴はその紋所、「璃寛」は吉三郎の俳號で、橘はその紋所でもあります。これは歌右衛門びいきが我が田へ水を引いた落語であらうから信用は出来ませんが、事實においても全く歌右衛門の方が勝ち軍であつたらしい。そうして次ぎの四月興行に、歌右衛門の方は「一の谷」の熊谷と「伊勢音頭」の貢をしました、それまでは陣屋の熊谷は、淨瑠璃の本文通り有髪の僧であつたのを、この時に歌右衛門の新工夫で、兜を取るとグル／＼坊主でした。それから此の型が今日まで行はれて居ますが、當時の見物は見馴れて居ないから頗る評判がわるかつたらしい。それと反對に、吉三郎の方は「青柳硯」の小野道風をつとめ、京都東山の俳諧師土卵に堂上方の衣裳を調べてもらつてそれを参考したり、掛額の文字はわざ／＼天王寺にあるのを手本にして習つたり、初日を出すまでに色々苦心した甲斐があつて、この道風が大評判となり、そのために歌右衛門の方が負け軍になりました。これから歌右衛門一座はすぐに京都の北側芝居へ引越して行つたので、

「熊谷が夏の道風にあてられて

あたま丸めて京へ御隠居」

といふ落首がありました。しかし、そのグル／＼坊主の熊谷が今日では一般の型となつた所を見ると、當時は失敗だつたけれど、とう／＼最後の勝利を獲たのであります

さて、京都でも「一の谷」の熊谷をつとめ、そのほかに「古手屋八郎兵衛」と例の「七變化」を出して、大入りを取りましたが、火消し人足が無銭で見物しようとしたのを木戸で容れなかつたため、大勢が襲撃して、表飾りから舞臺の道具だてまで打壊し、興行はそれなりになつて中の芝居へ歸りました。そうして十一月に再び北側芝居で、「忠臣藏」の師直と勘平と戸無瀬、それに「吃の又平」をしました、同時に南側芝居では、吉三郎が「青柳硯」の道風と「左甚五郎」をし、翌年一年の正月は、双方とも大阪へ歸つて、歌右衛門は中の芝居で「清水清玄」と「道成寺」、吉三郎は角の芝居で「朝顔日記」の宮城阿蘇次郎をつとめ、何處までも附いて廻つて競争するハメになつたのは全く妙な因縁であります。

しかし次ぎの三月興行に、吉三郎は京都へ行つてしまひ、歌右衛門はやはり角の芝居で宮本無三四を演じて大當りを取りました。舞臺で日の丸の鐵扇をつかふのを市中でまねて、男はいふまでもなく、遊里では婦人までが日の丸の扇を持つたといひます。そうして中途から切狂言に「宿無團七」を出し、これを名残りとして大阪を出發し、北陸道を経由して二度目の江戸下りをしました。

二度目の江戸下り

この時も江戸で出勤した劇場は中村座でした。金主の大久保今助が歌右衛門で大儲けをした前回の味を忘れかねて、再び呼び寄せたものと見えます。もつとも前の江戸下りには三津五郎との競争でありましたが、今度はその三津五郎も同座に居たので、敵同士顔合せといふ事が人気を高めました。最初が六月興行の「双蝶々」で、歌右衛門の放駒長吉に三津五郎の濡髪長五郎、二番目が「戻鴉」で、歌右衛門の浪花の次郎作に三津五郎の吾妻の與五郎、そうして瀬川多門の禿でした。八月が「伊賀越」で、歌右衛門の内記に三津五郎の政右衛門、九月が「阿古屋琴責」で、歌右衛門の岩永に三津五郎の重忠でした。初日に岩永が人形振りでしたのを見て、重忠も早速同じ人形振りをやつたのを歌右衛門が感心して、なるほど三が津での名人は三津五郎だと言つたさうであります。それから十一月は「吉田屋」で、夕霧と伊左衛門とを兩優が二日替りでした。その翌年も同座で兩優が一座しましたが、十一月、二年ぶりで歸阪して角の芝居へ出ました。

珍訴訟と流行

上方へ歸つて來ると、相變らず吉三郎との競争であります。歌右衛門の歸つて來た十一月は、吉三郎が京都へ行つて居たので獨り芝居でしたが、翌文化十三年の正月、歌右衛門が角の芝居で「伊賀越」の丹右衛門と内記、「戀飛脚」の忠兵衛をして居ると、吉三郎も隣の中の芝居へ歸つて「薄雪」を演じようとしたのが、役者や金主の都合で延び／＼になりました。はじめの考へは秋月大膳を片岡仁左衛門にさすつもりだつたのが、その仁左衛

門は歌右衛門の方へ買はれて行つたので、眼先きを變へるために、敵役は得意でない吉三郎がそれを背負はせられました。ところが歌右衛門の方では、二度目の江戸下りにやつた「九變化」の所作を出したので、吉三郎の方は見物が薄くなつて、本人の病氣をかこつてに芝居を休みました。

この時に出來た「藝道妨げの出入り」といふ前代未聞の訴訟記録があります。原告は吉三郎、被告は歌右衛門と金主の伏見屋善兵衛で、その大要は、歌右衛門が江戸から歸つたので自分の芝居が不入になつた事、自分は所作が出來ないのに、歌右衛門は何時も所作を出して自分の藝を妨げる事、歌右衛門の芝翫染や鶴菱模様が流行して、自分の璃寛染がすたれた事、そういふ箇條を列べて、結局、歌右衛門の所作事を停止してくれといふのであります。これに對する歌右衛門と善兵衛の申開きもありますが、こゝに省略するとして、かういふ珍訴訟が事實においてあるべき筈はありません。歌右衛門を揚げて吉三郎を抑へるため、訴訟記録の体裁を假りた好事家の惡戯であることは一見して明らかであります。當時兩優の競争が何んなに猛烈であつたかは、此の怪文書によつて知ることが出來ます。

これもやはり同年に出來た摺物であります。が、「芝翫璃寛はやり物見立勝負附」といふのがあります。それによつて、當時大阪で兩優の名を冒した商品の澤山あつたことに驚かされます。こゝには歌右衛門の分だけを載せます。

芝翫合羽。芝翫蕎麥。芝翫丈長。

芝翫饅頭。芝翫煎餅。芝翫白酒。芝翫紙入。
 芝翫煙管。芝翫蓆入。芝翫簪。芝翫鬚くまり。
 芝翫日傘。芝翫松。芝翫垣。芝翫小紋。
 芝翫卷紙。芝翫熨斗。芝翫齒磨。芝翫蠟燭。
 芝翫いろは歌。芝翫曆。芝翫酒。芝翫鶴。
 芝翫香。芝翫折物。芝翫茶色。

引幕事件と今助の訴訟

文化十四年も角の芝居に居て、正月興行に「廿四孝」の横藏と「重井筒」の徳兵衛をしましたが、最負連中から天鵝絨の幕と、金糸で舞鶴を繡つた水引とをもらつたのが問題となつて、この事件に關係した五十人ばかりが檢舉され、歌右衛門も取調べの済むまで町内預けとなりましたが、結局一貫文の過料に處せられました。このほかに縮緬の幟が五本あつたけれど、それは隠してしまつたので、問題とならずに済んだそうです。

なほ、それと殆ど同時に起つたのが、江戸の金主大久保今助から告訴された事件であります。それは二度目の江戸下りに、三が年つとめる契約だつたのが、一か年きりで大阪へ歸つてしまひ、度々契約の實行を迫るけれど要領を得ないから、政府の威光によつて江戸へ呼下し、吟味の上で芝居へ出勤するように命令してくれといふの

であります。もつとも、この訴訟は表面だけで、すべて江戸時代には俳優が自由に動けなかつたから、双方の八百長でわざと裁判沙汰にして、それを口實に上方から江戸へ下るとか、江戸から上方へ上るとかしたのであります。

今助がこの訴訟をした時は、まだ大阪で引幕事件が落着かない前でしたが、いよいよそれが落着いたので、歳末に押詰まつてから大阪を出發しました。

三度目の江戸下り

この時も、劇場は中村座で、歌右衛門といふ名を遠慮して俳號の芝翫を藝名につかひました。また前回と同じく三津五郎も一所でした。けれど、兩優が互ひに座頭の地位を争つたので、若輩ながら七代目團十郎を番附面だけの座頭にして、双方を納得させたといひます。そうして歌右衛門の御目見得狂言は「三代記」の佐々木高綱で、たつた二幕だけ出る給金が二百兩と、別に衣裳料が百兩。その頃の相場としては先例のない高給であります。三日目にはもう客留めになつて、金主の今助はこの一興行だけで六百兩も儲けたといひます。

それが文政元年二月で、歌右衛門は四十一歳です。そうして五月興行は「妹背山」で、歌右衛門の定香に三津五郎の大判司でしたが、五日目に客留めとなり、金主の今助が在來りの狂言と知らないで、狂言作者の櫻田治助に十兩の褒美をやつたことが、今でも劇界の笑ひ咄として残つて居ます。

翌年の三月は「鏡山」のお初で、山出し女のやうな拵へをしたのが、とにかく奇抜な新演出でした。岩藤は三津五郎でしたが、大切が三世菊五郎の「助六」で、歌右衛門は意久をしました。紀州侯の姫君が通りがりに駕籠の中から御覽になり、これが大問題となつて御供頭の武士が切腹したのは此の時です。その後の興行も始終大入りをつづけましたが、「阿漕浦」の治郎藏と「九變化」の所作を名残りとして歸阪し、江戸の舞臺は全くこれが最終でした。

晩年の活躍

大阪へ歸つてからは元の通り歌右衛門を名のつて、相變らず角の芝居を本城とし、たまに京都の北側芝居へ出て居ました。すると、文政四年に三津五郎が江戸から来て、「布引」の實盛に歌右衛門は瀬尾をつとめ、なほ「鏡山」の岩藤とお初、「妹背山」の大判司と定香、「吉田屋」の夕霧と伊左衛門との毎日替り、いづれも江戸で兩優が演じた通りを繰返しました。

三津五郎は正月興行きりで京都へ行つてしまひましたが、その跡の角の芝居はこれまで睨合つて居た歌右衛門と吉三郎を和睦させて、十八年ぶりで兩優を一座さすことになりました。この時、吉三郎は橋三郎と改名して居ましたが、その最負連が淀川の涼み船へ二人を招待して徹夜の宴會を催し、いよいよ九月興行で顔を合はすといふ間際になつて、橋三郎が病氣になり、しかも間もなく歿したので、とうとう歌右衛門との顔合せは實現されず

了りました。

次ぎの文政五年二月は、中の芝居で「五山桐」の石川五右衛門をしましたが、この時、角の芝居へ三津五郎が戻つて同じく五右衛門をしたので、またも二人の競争となりました。そうして三津五郎はこれきり江戸へ歸りました。最初は江戸の劇場で猛烈に競争した兩優が、後には江戸でも大阪でも始終一座して居たに拘はらず、再び競争芝居をして、それきり永遠に別れたのであります。なほ歌右衛門はこの後も大阪と京都で活動して居ましたが、文政六年は實父たる元祖歌右衛門の三十三回忌に當るので、菩提所たる高津の正法寺で盛んな追薦を行ひ、更にその翌年、自分の壽藏碑を同寺へ建て、これは今日でも存在して居る筈であります。

次いで文政八年、歌右衛門は四十八歳になりましたが、とかく病氣がちなので舞臺を退くつもりで、角の芝居で一世一代の名残りとして、「腰越状」の五斗、「彦山」のお園、「一の谷」の熊谷、「姫小松」の俊寛をつとめました。更に京都と堺の芝居へ出で、それから翌年も京阪の舞臺に現れて、とうとう退隠しませんでした。これは歌右衛門が引いては道頓堀が衰微するから再勤してくれと頼まれた、めだといふ事になつて居ますが、その裏面には何かの駄引があつたらうと思ひます。

この一世一代を演じてから、最終の舞臺をつとめるまでは十三年の歳月があつて、その間に歌右衛門の藝はますます振つて居ます。そうして天保十一年冬、中の芝居で改名して中村玉助となり、四世歌右衛門の名前は、門弟の二世芝翫に譲りました。

それから舞臺には出て居ましたが、始終病氣がちで、天保九年、中の芝居で「菊萱」の新洞左衛門と「石切梶原」をつとめたのを最終の舞臺として、七月十三日、六十一歳で歿しました。前に述べた高津の正法寺に葬られて、法名を歌唄院宗讚日徳といひます。

新演出と文才

歌右衛門の藝は器用で、技巧に富んで居ましたが、舊い脚本にも新らしい解釋を試み、先人と違つた新演出を見せて見物を悦ばせました。老衰した歌舞伎劇はこの人によりて若々しい活氣を吹込まれたため、今日まで生き延びることが出来たといつても過言ではありません。随つて歌右衛門の創めた型で現在に残つて居るものが澤山あります。

前に述べた「陣屋」の熊谷のグル／＼坊主などもその一例であります。その前の「檀特山」の場も、歌右衛門のやつた型が七世團十郎に傳はり、七世團十郎のが更に九世團十郎に傳はつて、今日では殆ど一般にそれが行はれて居ます。「扇屋」の熊谷も、久しく廢れて居たのを歌右衛門が復活し、五條の橋で敦盛との組討を見せたのが、やはり現在にも襲用されて居ます。また「石切り」の梶原で、原作の星合寺を荏柄天神に改め、茶の手前を酒盛りにしたのも、同じく歌右衛門のはじめた新演出で、しかも今日までそれが一定した型となつて居ます。

「菅原」の道明寺の場で、在來の道具飾りの前に、玄關と庭の泉水と、合せて三杯道具をかつたのも歌右衛門

のはじめた型であります。前に述べた「鏡山」のお初の山出し姿などは、あまり凝り過ぎて感心しません。

歌右衛門の新演出にも時々そんな穿違へはありますが、何んな狂言でも昔の通りでは満足しないで、始終工夫をして改修を施した努力は、さすがに新しい時代をつくり出した名優だけあります。そうして晩年には俳優のほか

に作者も兼ねて、番附にも俳優としては中村歌右衛門、作者としては金澤龍玉、兩方の名前を出しました。とにかく自分で脚本をいぢるだけの文才があつて、俳句もつくれば狂歌もやる、手跡も見事で、あまり上手ではないが繪も描いたし、音曲の方も出来ました。

俳名の由来

歌右衛門の俳號は、はじめに芝翫といひ、後には梅玉と改めたので、この人のことを「梅玉歌右衛門」といひます。その芝翫といふ俳號は、最初に俳諧を學んだ東山の土卵が名づけ親なのであります。歌右衛門と競争した嵐吉三郎の李冠といふ俳號も同じく土卵が名づけたのですが、これは「李下冠を整へず」といふ出典があるけれど、芝翫にはそいふ出典がありません。土卵がそれを氣にして居たのを、狂詩家の安穴道人が聞いて、芝を采り鶴を翫ぶは仙人の常事である、ことに歌右衛門の替紋は鶴菱だから、いよ／＼芝翫といふ語に意義がある。そういつたので土卵が大層悦んだといひます。しかし歌右衛門には先輩に當る嵐三五郎が俳號を來芝といひ、歌右衛門はこの三五郎に引立てられて恩義がある所から推察すると、芝翫の「芝」は來芝の「芝」から來て居るのでは無から

うかと思ひます。

その吉三郎は病氣になつたので、李冠の俳號が自分の性に合はないのかも知れぬと、音だけ同じい璃寛に改め、また歌右衛門は芝翫の俳號を後に四世歌右衛門になつた門弟に譲つて、自分は梅玉と改めたのでありますが、この梅玉もむづかしい出典は多分なからうと思ひます。歌右衛門よりも先輩の嵐雛助は世間で名前をいはずに、たゞ「玉」といつたといひます。だからその追悼録の表題も「玉の光」となつて居ますが、玉といふのは「親玉」を略したので、即ち劇壇の傑物であることを意味するのでしょう。また歌右衛門も世間から「眼玉」といはれ、後には自身でもそういつて居ましたが、これは眼が大きかつたからでもあるけれど、一面にはやはり劇壇の傑物であるといふ意味が含まれて居ます。梅玉の「玉」もその通りですが、「梅」は浪花を暗示したので、即ち「大阪劇壇の傑物」といふ意味かと思ひます。また歌右衛門を改めて玉助といつたその「玉」も同じでしょう。

もう一つ、作者として金澤龍玉といつたのは、父が加賀の金澤の出身で、屋號が加賀屋だから「金澤」といひ、四世團十郎が着用した景清の衣裳で、象棋の駒に「龍王」と書いた模様のあるのを、自分が譲り受けたので、その「王」を梅玉の「玉」に改めて「龍玉」といひ、また替紋にもつかつたのであります。序にいひますが、「龍王」は飛車の駒が裏返つたのだから、それに因んで、後の四世歌右衛門は屋號を成駒屋といひました。

子孫と門葉

歌右衛門は親孝行だつたといひます。江戸の芝居を舞納めて大阪へ歸る時、ある最負の客が、千兩やるから歸つてくれるなといつたら、老母が待つて居ますと聽かなかつた。でもその客が無理留めしたら、可愛い、女も待つて居ますよつてと言つたので、それきりになつたといふ咄があります。その老母も賢夫人であつたらしい。何しろ歌右衛門は若い時に父に無くなられて、自分は殆ど小芝居ばかりに出て居たのを、大芝居へ引上げたのは亡父の先輩たる嵐三五郎などの斡旋だつたといひながら、あれほどの名優に仕立てるまでには、母親の努力が大變だつたらうと思はれます。そうしてその努力が終に酬られたのであります。

妻はお八尾といつたとの事です。文化八年の「役者内儀見立相撲」を見ると、「よの」とあります。別にそういふ先妻があつたのか、それともお八尾の前名なのか、よく分りません。そうして夫婦の仲には橋之助といふ男子が一人あつたけれど、多病であるために役者をよして芝翫堂といふ藥店を営み、人參百奇圓といふ藥を賣つて居ましたが、父に先だちて、天保三年十月に歿して居ます。養子は梅花と鶴助と二人あつて、梅花は女方で後に松江といひ、鶴助は立役で、後に三世芝翫となりましたが、いづれも若死しました。

また門弟で重だつたのは歌六と富十郎とであります。二人のうち富十郎の方が年上であるけれど、入門した順からいふと歌六の方が上席になります。そうしてこの歌六の實子が三世歌六で、またその子が今の吉右衛門であります。

このほか、名人といはれた二世關三十郎も歌右衛門の門弟であります。四世歌右衛門となつた二世芝翫も同じ

であることは無論ですが、この四世歌右衛門の養子が四世芝翫でそのまた養子が今の五世歌右衛門であります。

最負客と頼山陽

歌右衛門の最負客はあらゆる方面に涉つて殆ど無数でしたが、富豪では今橋の鴻池善右衛門と鰻谷の吉野五運とが兩大關でした。鴻池は説明するまでもありませんが、吉野は人參三臟圓の本舗で、有名な「許多脚色帖」や「攝陽奇觀」を所藏した舊家であります。歌右衛門の作つた「くすの玉」といふ小唄は、この五運が江戸の旅から大阪へ歸るのを詠じたものらしい。

「その頃は吾妻下りの在原と、まかぶ黛厚額、五運ぞまさに明らけき、日よりもよしや三吉野の、花の花みる吉原で、手をとらせたる豆男……。」

このほか、大阪中の歌右衛門最負をしるしたものは、文化十二年出版の「芝翫節用百戲通」に、男を廿四名、女を廿九名、更に遊女、藝子、仲居、素人を四季に分けて四十八名を擧げてあります。文化十二年の「芝翫最負花實知」は都合二百廿人を擧げました。文政三年の「芝翫年代記」には「浪華最負連」として都合四百七十六人の名を列記して居ます。そのうちに珍とすべきは「江戸蜀山人」、「カラ沈萬珍」とあることでもあります。沈萬珍とは何ういふ人か知りませんが、支那人で歌右衛門に關係があつたと見えます。蜀山人は歌右衛門が初めて江戸へ下つた時に、やはり土地最負の意地から、同僚に對して頻りに惡罵を放つて居ますが、最後には歌右衛門を諷

歌するやうになつたのであります。

ついでに頼山陽と山陽の母さんとが歌右衛門最負であつた咄をしましょう。それは例の正法寺へ壽藏碑を建てた文政七年に、山陽の母の梅麿女史が倅を尋ねて廣嶋から上洛する途中、大阪の角の芝居を山陽に連れられて見物すると、丁度歌右衛門が「忠臣藏」をして居る時で、それから京都へ着いて、今度は因幡藥師の芝居へ見物に行くと、同じく歌右衛門の「忠臣藏」でした。かやうに同じ役者の同じ藝を大阪でも京都でも見るといふのは、よく／＼の最負だつた證據ですが、その時に歌右衛門の槍のつかひやうが何うも氣に食はないので、女史がアツといつたのを、舞臺から歌右衛門が見て居て、弟子に跡をつけさせ、その宿所をつきとめて自分が挨拶に行つたといひます。

それから、この翌年に、やはり京都で誰かゞ山陽を招待して、その取持ちに歌右衛門を呼びました。すると山陽が大層悦んで、「わしは大阪に好い芝居があると、舟で下つて見物に行つては、何時もお前の藝に感心するが、今日のはじめて對坐して、素顔の醜いのを見たので、いよ／＼お前の藝のすぐれて居ることを知つた」と言つたさうです。この時に山陽が歌右衛門に詩を書いてやりました。

舊譜翻來總覺新。眇軀扮化萬千身。愧吾手腕受纏縛。不逞別才傲古人。

梨園白髮未知新。萬目奔流勇退身。採取驪龍珠幾顆。剩將鱗爪附餘人。

酒間戲作贈龍玉。時乙酉八月也。山陽醉客。

後の句は、歌右衛門に龍玉といふ別號のあることを聞いたからであります。そうして歌右衛門も扇面に次ぎの狂歌を書いて山陽に贈りました。

「ひらかせる筆のいなづま墨の雲、音に聞こえし雷をいたゞく。」

「雷」を「頼」にもちたのであります。

また、文政十年八月、歌右衛門が備中宮内を巡業した時、本居派の歌人で、吉備津神社の社家頭の藤井高尚が自分の別荘へ招き、藝道について色々なことを尋ねたといひます。それを筆記した「落葉の小草」といふ冊子があるさうです。高尚もやつぱり歌右衛門最負だつたのでしよう。

梅かのこ終

三代歌右衛門(初代梅玉)百年追善

“梅かのこ” 發刊に就いて

白井松次郎

稀代の名優三代中村歌右衛門逝いて 當年は壹百年に相當致しますので、五月の大阪歌舞伎座で百年追善記念興行を開演致します。皆様御承知の様に、三代歌右衛門は、大阪で生れ、大阪で育ち、大阪の人氣役者として、京大阪江戸三ヶ津にその聲名を謳はれ、その人氣は一世を風靡したばかりでなく、その藝境の廣く且つ深かつた事は、この冊子で伊原先生も述べられて居られますが、百年後の現劇壇に東西を問はず三代目の足蹟は常に賞揚されて居る諸事に兆しても、如何に名優であつたか、窺はれるものでございます。

三代歌右衛門の一生は、眞に日本演劇史に輝く彗星の如くで、この名優の百年追善を、同優發祥の地である大阪で營むことは、まことに意義深いものと存じます。

この機會に當りまして、吾が大阪の大先考三代歌右衛門を一層深く皆様に識つて頂くためにも、特に伊原先生にお願い致しまして、茲に、この冊子を得た次第でございます。お多忙中にも不拘、御執筆下さいました先生の篤志を謝すと同時に、吾が大阪劇壇將來のためにも、此度の記念興行に對し、特別の御支援を御願ひ申上げる次第でございます。

154
98

昭和十二年四月二十日印刷
昭和十二年四月二十五日發行

著者 伊原敏郎

發行者 鳥江鏡也

發行所 大阪府南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店

印刷所 大阪府西區土佐堀通一丁目十二番地
永井日英堂印刷所

154
98

154
98

